

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館 ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



長崎・浦上天主堂のマリア像

私は、四歳の時長崎で被爆し、なんとか五六年目の夏を迎えることができませんでした。いま、元気なうちにといい、被爆者の会の事務局を手伝っておりま。まだ何も分らず皆様にこそわりながら勤めております。

五六年目の夏「恒久平和」を願う

吉村 和弘

私は、四歳の時長崎で被爆し、なんとか五六年目の夏を迎えることができませんでした。いま、元気なうちにといい、被爆者の会の事務局を手伝っておりま。まだ何も分らず皆様にこそわりながら勤めております。

「戦争展」では広島・長崎や沖縄戦の展示とともに、第五福竜丸事件のパネル、死の灰、ガイガーカウンター、船の模型の展示とともにノーマ・ヒバクシャのコーナーでアメリカ、ワシントン州ハンフォードの核兵器製造工場での被爆と被害(名もない墓など)の写真パネルなどが展示されました。

二十代の一〇年間ほど、遠洋マグロ漁船にコックとして乗り込んだ体験を持つ。戦争展の最終日には、ハンフォードから来日されたトム・ベイリーさんのお話がありました。核工場から六マイル風下地域で二七万人が被害を受けたそうです。トムさんの家族、両親も肝臓ガン、甲状腺ガン、ご本人も甲状腺ガンにかかり、出血や抜毛など私たちが被爆者と同じ病状です。

夏休み、子らの声展示館に響く

八月の展示館には、中高生が自由研究や宿題で来館し、熱



心にノートを取る姿が連日見られます。八月十日には、目黒区の油面児童館の学童保育の児童四名小学一年から四年)が「夏休み企画」で来館。ボランティアに船を案内してもらい、紙芝居やマグロのお話しに、元気な声をあげていました。

原爆忌俳句大会に協会賞

原爆忌野良着は皺のまま乾く

菊川 繁雄

第三回原爆忌東京俳句大会で第五福竜丸平和協会賞を受賞した作品です。

原爆忌東京俳句大会(主催同大会実行委員会)は、八月五日午後一時から東京・北区教育会館で開かれました。今年の大会作品の応募は一二三句(六月一〇日締切)、四八人の大会選者と実行委員の選句の得票数、特選数などに基づいて、東京都知事賞はじめ、

後援団体・協賛団体の各賞、秀逸賞などの作品が顕賞されました。後援団体賞は次の作品でした。

東京都知事賞

ひろしまのどの樹も人の匂いもつ

粥川 青猿

現代俳句協会賞

中村 重義

水の匂い日の匂いして八月来る

西場 栄光

第五福竜丸平和協会賞(前掲)

東京都原爆被害者団体協議会賞

兵歴の染み込んでいる裸拭く

原爆忌東京俳句大会には金子原二郎長崎県知事、秋葉忠利広島市長、伊藤一長長崎市長からメッセージが寄せられました。大会には七九名の俳句人が参加、大会選者による選評、また緩急車雲助さん(広島在住)による「石の影を焼きつけた男」をテーマとし原爆く

よりのこやしやくもおこなわれしました。また当日俳句会では、一四〇句の事前投句の互選がおこなわれ、畑尾美代子さんの「黙禱の補聴器に湧く蝉しぐれ」が一位となりました。平和協会から山村茂雄理事があいさつ、大会は午後五時すぎ散会しました。

9月23日 久保山愛吉さんなど多彩な催し

久保山愛吉さんの四七回目(命日)にあたる九月二三日には、平和をねがい展示館を利用した催しが開かれます。

◇第二一回久保山忌句会/主催

同実行委員会/集会十時、句会

江東文化センターで午後一時。

◇第九回平和を語る第五福竜丸の集い/主催

平和を語る会/十時半より十五時

音楽・語り・紙芝居などによる平和の訴えの会

◇9・23第五福竜丸のつどい/主催

東京原水協/十二時半より

第一部・福竜丸の声を聞く(見学会)、

第二部・お話と交流のつどい(夢の島体育館)

◇マグロ塚を作る会9・23

平和と交流のつどい/午前十一時より

第五福竜丸をひろげる展示用貸出

パネルができました。十七枚組

『第五福竜丸を知っていますか』

のタイトルです(貸出料などご相

談ください)。ガイガーカウン

ター、「死の灰」、福竜丸模型な

どの貸出しもいたします。



飯塚利弘著 『久保山愛吉物語』を
読む

このたび第五福竜丸平和協会の評議員で焼津市で福竜丸やビキニ事件の調査・研究をすすめられている飯塚利弘さんが新しい著作『久保山愛吉物語』をまとめられ、刊行されました。

『久保山愛吉物語』は、第一部生いたち、第二部ビキニ被災―世界初の水爆犠牲者、第三部怒りと運動の広がり、の八章から成り、そのうち四章までが生いたちの部分にあてられています。

久保山さんは一九一四(大正三)年六月、焼津の漁師の家に五男五女の四男として生まれましました。―焼津・浜当目の海や、野山を駆け、大家族のなかで育つ少年愛吉、目黒の無線電信講習所に学

ぶ通信士となるその道筋、戦争のなかの青春、戦時徴用船での戦争の体験、すずさんとの結婚(一九四三年)、兄と弟の戦死、また、戦争の通信士としての仕事、第五福竜丸に無線長として乗り組む(一九五三)など、エピソードをまじえて「人間・愛吉」の生きた時代が語られています。

三月一日の早朝「西方に巨大な火の玉」を見たあと、数分後に衝撃音を感じた第五福竜丸乗組員はこれを核実験と察知し、無電連絡をしないまま焼津への帰港を急いだことはよく知られています。

久保山さんは後に「無電を米軍にキャッチされて、船がボカチンを喰うといけなから」とも話しています。なぜ、どうしてそのように判断したのでしょうか。

この久保山さんと第五福竜丸幹部の判断的確であったことはその後の事態の進展のなかで立証されていきます。焼津に帰港後、第五福竜丸と乗組員の被災が明らかになったアメリカの水爆実験、その被災に対してアメリカがとりつけたのは、軍事機密の保持と隠蔽策優先でした。明らかにする実験の

族に宛てた手紙を焼津市からお借りして展示いたしました。

また、一八日には、大石又七さんを講師にお招きし「私の人生を変えた第五福竜丸」その後の「ビキニ事件」と題してお話を伺いました。大石さんには、東京からの長距離移動にもかかわらず、質問コーナーなどを交えながら熱心に約二時間お話をいただきました。来場者から「第五福竜丸のことは過去の話と違って。いまだ補償問題などで苦労されていたとは」「あつという間の二時間。分かり易く、身近な問題として考えることが出来た。核兵器は使用しなくても恐ろしいものだ。」などの感想が寄せられたことな

実態と被害にろうばいするアメリカは、第五福竜丸を沈める、乗組員はスパイだという言明までするのです。著者は書いています。「アメリカの最大の軍事機密である未曾有の水爆実験に巻き込まれた第五福竜丸、それを最悪の事態から救ったのは乗組員(幹部)の英知と英断であった」(後書)。

第五福竜丸が無電を打つと「ボカチンを喰う」かもしれないという判断背景には、久保山さんの徴用船乗り組みの体験もあったのだろうと思います。戦時中、海軍に徴用された漁船は食料や弾薬を輸送する一般徴用船と特殊艦船として使われました。特殊艦船は、必要な小火器などを装備して、「太平洋の真ん中でアメリカの機動部隊の動きや来襲を監視し、発見したら打電するのが任務でした。しかし「敵艦発見」の無電発信は日本海軍だけでなくアメリカの艦隊にもキャッチされるのです。台風でも船を移動させたり避難させることは許されなかった定位置での「敵艦発見の無電発信は監視船の最後を意味」します。久保山さんはその監視船に軍属と

でも核兵器などに対する関心が高いことがうかがえます。私たちは今後ともこの原爆展を続け、多くの人に「核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ」を訴え続けていく必要を再認識しました。

(寄稿・西宮市国際交流課)

七月二六日から四日間、さいたま市で開催された「平和のための埼玉の戦争展」では、広島・長崎、世界のヒバクシャと核兵器廃絶のコーナーに第五福竜丸展示館が新たに作成した一七点のパネルによる被災写真や「死の灰」(現物)、ガイガーカウンター、大石又七さん製作の模型船などが展示されました。また手作りのしかけ絵本でビキニ被災や地雷撤去、日本国憲法などについて学ぶ平和クイズコーナーや参観者が「平和宣言」を書くコーナー、平和の文化をインターネットで発信するコーナーなど若者のアイデアと参加が随所に見られるとりくみでした。

して配属されていました。

本書が引用する『焼津漁業史』によれば、徴用された焼津漁船九〇隻余のうち、生還できたのは一三隻、戦死した焼津漁民は五〇〇人を越えたとされています。

本書には、「これはおとうさんだから」といって、すずさんが手元に置いていた愛吉さんの『手記』が多く引用されています。「手記」は未完、いいたいことがたくさんあったであろう久保山さんの想いがつたわります。

本書が、核兵器実験の非人道に對する糾弾と告発にあることは言うまでもありませんが、本書を親しく読みすすめることができるのは、愛吉・すずさんへのまなざしの温かさです。そしてもうひとつは、焼津の土地、焼津の漁師たちの戦中・戦後の生活に問題を広げる視線と叙述のありようでした。

一九九三年に刊行された『死の灰を越えて―久保山すずさんの道』同様、本書も広く読まれることを希います。『久保山愛吉物語』は、四六判二四〇頁、かもがわ出版、本体一九〇〇円

(山村茂雄・平和協合理事)

『原爆展』に
第五福竜丸コーナー
＝ 兵庫県西宮市 ＝



原水爆禁止西宮市協議会では、西宮市・市教育委員会・西宮親子劇場共催で、毎年七月下旬の時期に「原爆展」を開催しています。

原水禁止西宮市協議会の発足は、第五福竜丸の被爆事件に端を発しています。当時、社会的に高まる原水爆禁止運動の中、昭和三年(一九五八年)七月に協議会が結成され、「誰でも参加できるように」という設立理念に基づいて、思想・信条等の違いを越えて、統一した市民活動を続けています。

今年の「原爆展」は、七月一八日(水)から二三日(月)まで、JR西ノ宮駅南のフレンテ西宮で開催しました。原爆関連コーナーでは、広島市よりお借りした被爆の原物資料等を展示するとともに、西宮原爆被害者の会の皆さんに「語り部」をお願いし、原爆の悲惨さを訴えていただきました。第五福竜丸についての展示は例年行っていますが、この度は「知っていますか第五福竜丸」として、写真パネルや死の灰、船員の方に宛てた手紙などを(財)第五福竜丸平和協会から、また久保山さんの家



また、一八日には、大石又七さんを講師にお招きし「私の人生を変えた第五福竜丸」その後の「ビキニ事件」と題してお話を伺いました。大石さんには、東京からの長距離移動にもかかわらず、質問コーナーなどを交えながら熱心に約二時間お話をいただきました。来場者から「第五福竜丸のことは過去の話と違って。いまだ補償問題などで苦労されていたとは」「あつという間の二時間。分かり易く、身近な問題として考えることが出来た。核兵器は使用しなくても恐ろしいものだ。」などの感想が寄せられたことな

埼玉・平和の
ための戦争展

七月二六日から四日間、さいたま市で開催された「平和のための埼玉の戦争展」では、広島・長崎、世界のヒバクシャと核兵器廃絶のコーナーに第五福竜丸展示館が新たに作成した一七点のパネルによる被災写真や「死の灰」(現物)、ガイガーカウンター、大石又七さん製作の模型船などが展示されました。また手作りのしかけ絵本でビキニ被災や地雷撤去、日本国憲法などについて学ぶ平和クイズコーナーや参観者が「平和宣言」を書くコーナー、平和の文化をインターネットで発信するコーナーなど若者のアイデアと参加が随所に見られるとりくみでした。